

令和5年度 口演発表の エントリーシート

新潟県赤十字安全奉仕団活動事例発表会 エントリーシート	
分団名	新潟県赤十字安全奉仕団 上越市分団
【演題名】分団活動を広げる取組 ～赤十字フェア、ハートラちゃん講座(短期講習会)の紹介～	
【発表要旨】	新潟県安全奉仕団上越市分団(以下「分団」という)の活動を一般市民に広く紹介して関心をもってもらい、分団員の活動の機会と場を広げるという目的で開催している「赤十字フェア」や「ハートラちゃん講座」を紹介する。
【活動の目的・実施に至る経緯】	かねてから「分団がどのような活動をしているのか分からない」「活動を紹介する場が欲しい…」という意見が分団員から出されていた。そこで、感染症の流行が鈍化してきたことを機会に、昨年度から市内の商業施設を借りて、分団の活動を紹介する「赤十字フェア」を開催し、今年度は、「赤十字フェア」で体験したことをさらに深化させていく短期講習会として「ハートラちゃん講座」を開催している。
【方法】	○令和4年度 赤十字フェア(6月、11月) 市内の商業施設のオープンスペースを貸し切り、「救急法」「幼児安全法」「水上安全法」「健康生活支援講習」「野外訓練」に分かれて活動を紹介した。県支部からパネルも借用して掲示した。周知方法は、チラシを1週間ほど前から商業施設に置いたり、当日は商業施設を利用する市民に配布した。 ○令和5年度 赤十字フェア(6月) 会場や紹介する内容は令和4年度と同じ。前回の反省としてPR不足だったので、市の広報で紹介し、分団員には「赤十字フェア」「ハートラちゃん講座」の案内と申込葉書を郵送した。当日は、着ぐるみを借用し、呼び込みに活用した。 ○ハートラちゃん講座(7月、9月、10月) これまで単発で開催していた短期講習会を、「ハートラちゃん講座」としてまとめて実施し、多くの人が気軽に講座に参加し、分団の活動を知ってもらう機会にしている。
【結果】	幼児を養育している保護者の関心が高い「幼児安全法」、開催時期によってはニーズが高くなる「水上安全法」、握力測定など自分の身体を知ることができる「健康生活支援講習」、学校で習った心肺蘇生法をもう一度確認するための「救急法」、災害に備える知識や技術を習得できる「野外訓練」など、各コーナーへの関心は人それぞれである。来場者数は、回を重ねるごとに増えいき、今年度は約 50 組となった。「ハートラちゃん講座」の参加人数は各講習会10名程度ではあるが、今後も定期的に実施することで参加者は増加していくと思われる。
【考察及び結論】	これまでは、他の関係団体から依頼される救護活動が多く、分団独自の計画で実施する活動がほとんどなかった。新たな活動を立ち上げは、入念な計画と予算が必要である。役員への負担も大きくなりまくらないと気持ちが折れてしまうこともあるが、成功したときの喜びや達成感も大きい。今後は、「赤十字フェア」「ハートラちゃん講座」をベースに、参加者を絞ってPR活動を行うことや当分団の事務局である市の福祉課と連携しながら、分団員や一般市民も気楽に参加できるように活動を計画できる実動的な体制づくりをしていきたい。

〈参考〉

新潟県赤十字安全奉仕団活動事例発表会 エントリーシート	
分団名	新潟県赤十字安全奉仕団 新潟市分団
令和5年度 新潟県赤十字安全奉仕団 新潟市分団 野外訓練	
【活動の目的・実施に至る経緯】	新潟市分団では、月例研修の一環としてほぼ毎年1回吹き出し訓練を定番に据えた野外訓練を行ってきたが、ここ数年は新型コロナウイルス感染症禍、また日赤新潟県支部社屋の建て替え事業も重なり、この活動を停止していた。 今初夏は、新型コロナウイルスが5類相当に移行されたことにより活動の自粛も緩和され、日赤新潟県支部の新社屋も完成した。この新社屋は奉仕団活動を支援するボランティアルームに厨房設備も完備していること、また昨年の新潟県北部豪雨などは災害支援活動のニーズがいくつか発生するかわからないことから、久しぶりに当分団の発災時の活動を想定した野外訓練を実施することとした。 開催に際し日赤県支部へ協力を依頼したところ、庁舎及び備品の使用への便宜に加えて、関係団体(青陵大学学生奉仕団、無線奉仕団、日本防災士会新潟県支部)への参加お声がけの労もいただいた。
【方法(事業内容)】	日時:7/2(日)9:30~16:00 会場:日赤県支部 参加者:30名(分団15名、県支部2名、青陵大9名、無線奉2名、防災士会2名) 1. 開会式・オリエンテーション(委員長挨拶、自己紹介、スケジュール説明、諸注意) 2. 日赤県支部新社屋と資材備品庫の見学 ・被災者支援グッズとして展示していた段ボールベッドや安眠セットなどを紹介 3. 救護所設営訓練 ・パイプテントの組立 ・リフトテントの組立 ・簡易寝台の組立 ・バッテリーの使い・方確認 ・発電機の始動停止 ・投光器の発光 4. 防災用炊飯器とハイゼックスを使った炊き出し ・ハイゼックス使用して白米、炊き込みご飯(混ぜご飯)、パンケーキ ・災害用移動炊飯器による豚汁、ボランティアルームの厨房設備を利用しておでん、サラダ、漬物 5. 昼食(献食)、意見交換を踏まえた団らん 6. 無線奉仕団指導による無線を使った発信器の探索捜査体験 7. 後かたづけ、閉会式(振り返り)
【結果】	事故、熱中症等なく無事終了。
【考察及び結論】	参加者からは、各種防災備品の取扱いが学べて楽しかった等の感想が寄せられた。発災時にこれだけの品数の炊き出しメニューが必要なのかとの疑問も呈されたが、この度は関係団体との連携を踏まえた懇親も含めての活動ということでご理解いただいた。 非常に有意義な一日となった。ご協力、ご参加いただいた皆様に感謝を申し上げます。

新潟県赤十字安全奉仕団活動事例発表会 エントリーシート	
分団名	新潟県赤十字安全奉仕団 柏崎市分団
【演題名】	コロナ禍だからこそ、私たちが支えられる活動がある！ 仲間を増やしたい！～柏崎市分団の取り組み～
【活動の目的・実施に至る経緯】	令和2年以降、新型コロナウイルス感染症の流行により分団活動が激減し、新規団員募集の機会が持てない中で、退団者が相次いだ。柏崎市分団は、コロナ禍でも出来ることを模索しながら、内部研修やミーティングを重ねてきた。 やがて令和4年5月、中止が続いていた地元のスポートイベント「柏崎潮風マラソン」が、規模を縮小して実施されることになり、これまで救護ボランティアとして参加してきた柏崎市分団は、実行委員会から再び依頼を受けた。同イベントは全国からランナーが訪れる人気の高いマラソン大会であり、コロナ禍におけるリスクはあったが、赤十字の原点に立ち帰り、数年ぶりの地域活動に参加することを決定した。
【方法】	柏崎市分団では、東京マラソンのボランティア経験を持つ指導員のもと、独自に事前勉強会を行い、感染防止のための具体的な対応策や必要備品を確認する等、入念な準備・対策をした上で当日を迎えた。配属された各給水所では、救護活動を行うとともに、衛生管理や感染防止対策にも気を配り、実行委員や地域ボランティアに対し、ランナーとのソーシャル・ディスタンスを保つことや、マスク・使い捨て手袋の着用、細やかな消毒・手袋交換等を助言した。
【結果】	同大会には1274人のランナー、500人以上のボランティアが参加したが、結果は「感染者ゼロ」だった。実行委員や他の地域ボランティアの皆さんからは、「安全奉仕団がいると安心できる。今後一緒に活動したい。」とのお言葉をいただき、大きな励みとなった。終了後に参加者の所感と反省点・改善点を取りまとめ実行委員会に提出し、分団内部でも共有した。 翌年(令和5年)には従来の規模で柏崎潮風マラソンが実施され(ランナー1677人、ボランティア560人以上)、引き続き救護ボランティアとして参加したところ、前年に提案した改善策が反映される等、これまで以上に地域の信頼を得ていることが実感できた。 そして、同大会での活動等を掲載した柏崎市分団紹介チラシを作成し、その後の救急法講習会等では活動PRと団員募集を行い、少しずつ新たな仲間を増やしている。今年7月に実施した救急法講習でもPRタイムを設けたところ、受講した中学生の入団につながった。
【考察及び結論】	困難な状況でも、赤十字の原点を大切に、感染防止対策をしながら団員研修を積んできたこと、苦しいながらも仲間とともに、考えを出し合い行動に移した経験は、私たち柏崎市分団の大きな財産である。また、地域活動を通して得られた自信が、仲間づくりにつながっていると思う。これからも柏崎市分団の役割を自覚し、仲間を増やす努力をしながら、地域に根差した活動を続けていきたい。

新潟県赤十字安全奉仕団活動事例発表会 エントリーシート	
分団名	新潟県赤十字安全奉仕団 村上市 分団 ※協力分団:新潟県赤十字安全奉仕団新発田市分団 4名 新潟県赤十字安全奉仕団三条市分団 1名

**【演題名】 令和4年8月豪雨 村上市における被災者及びボラ活動支援
～被災現場でのボランティア活動を巡回訪問支援して～**

【活動の目的・実施に至る経緯】
 昨年8月4日の県北豪雨は、村上市関川村に甚大な被害を及ぼした。(後に12月11日の日報一面記事によると、荒川流域の平均雨量は8月3日・4日の2日間で564ミリと「400年」に1回の確率で発生する量に達した豪雨と掲載されている。) 8月6日に村上市、7日には関川村に災害ボランティアセンターが設置され、設置協議に参加要請を受けた赤十字新潟県支部は支援のため日赤災害ボランティアの派遣を決定した。村上市分団は新発田市分団及び三条市分団員の協力を得ながら27日間延80人の奉仕団員がボラ支援活動に参加したので、報告する。

【方法】
 日赤ボラの活動は、被災現場での被災者や災害支援ボランティアの支援活動中の健康管理、とりわけ熱中症予防と、熱中症初期の対応を具体的に伝えることを重点とした。活動の日は
 ① 出発前オリエンテーションで注意喚起・伝達(※別紙:注意喚起配布文書参照)
 ② 被災地域巡回を通し、被災者の皆さんにも同様の注意喚起
 ③ 巡回支援中にケガ等に遭遇した場合、緊急応急手当等を行なうことである。

【活動期間】
 <村上市災害ボランティアセンター開設期間>
 令和4年8月7日(日)～9月11日(日)
 <日赤災害ボランティア支援活動期間>
 令和4年8月7日(日)～8月31日(日)、9月からは基本、土・日とし、学生団体ボランティア

のサポートに限定した(9月6日(火)、10日(土)にも活動協力)
 <延べ派遣日数 27日間・延べ派遣人数 80人>
【結果】
 被災現場に出向き、ボランティア及び被災者に声を掛けられる際に、冷やしタオルと冷たい飲み物を配る当分団発表の給付活動が好評を得、他県から来たボランティアからも全国的にも稀な活動と喜ばれた。以降この活動は日赤災害ボラ活動の主軸となった。更に、8月12日からボラセン本部でも採用され、ボランティアが本部帰還時の飲み物・冷やしタオルの支給に繋がった。

出発前の注意喚起、及び巡回中の注意喚起・休憩の喚起が功を奏したのか、幸いにも活動期間中に緊急時の応急対応事案には遭遇しなかった。

【考察及び結論】

- 団体がバスで来る大学生・高校生ボラの場合出発前のオリエンテーション参加は代表の場合があり、被災現場で活動するボラに直接行う当方の「声掛け注意喚起」は効果的であった。(特に高校生ボラでは、熱中症予防の意識が薄く、症状寸前の生徒も見受けられた。)
- 被災5日目に現地巡回活動中、市街地で偶然訪問した被災高齢者世帯から「夜、不安で眠れない」との悲話があり、当日のミーティングでボラセン本部に報告、市保健婦訪問に繋がった。被災地では、支援要望を声に出せないままの在宅高齢者が存在することがわかった。後日、市民生児童委員連合の被災地ニーズ聴取訪問活動に繋がったことを報告する。
- 日赤マークシート付きの車、日赤マーク付きの活動服で被災現場で活動することにより、被災者から寄せられる赤十字への信頼・親近感を改めて肌で感じた。
- 期間中、日赤ボラの被災現場巡回訪問箇所は1日最大でも午前午後とも4～5町内・集落であったが、特に被害が大きかった町内・集落への巡回訪問で多いところで開催12回にも及んだ集落もあった。回数を重ねるごとに被災地のボラに対するニーズ変化が見えてくる。災害当初は一般住宅の泥出しなど生活優先であった。特に町内の役員が作業ニーズを取りまどめてくれる地区・集落は作業もし易かった反面、落ち着いてくると集落内の排水路の泥揚げ、果ては集落神社周辺の側溝の泥揚げとニーズにエスカレート化(変化?)が現出し、支援ボラも困惑した事案である。基本的にはボラセン本部のニーズ把握と対応可否の課題である。しかし、こうした場合の対応をミーティングで提起し、日赤ボラも本部スタッフ論議に参加してきたところである。他県から応援に来てくれた本部スタッフのアドバイスは、周辺環境の整備は災害復興に向け精神的支え、励みになるものであり、可能な限り協力してやってほしいというものであった。(同感に思ったところである)
- 9月末日赤後の災害ボラセン本部のまとめでは、市内、県内、隣県から4,000人を超えるボランティアが駆け付け、約4,000世帯の復旧支援活動を行ったと報告されている。村上ボラセンの母体たる社会福祉協議会にとって、この度の大規模かつ長期にわたる災害ボランティアセンター設置は初めてのことで、大きな成果であったと考える。引き続き地域に顔の見える社会福祉協議会として市民から信頼を寄せられる活動の継続を期待している。
- 最後に令和5年3月18日村上市民ふれあいセンターで行われた「災害復興・防災シンポジウム」で新潟県赤十字安全奉仕団に対して村上市から感謝状が贈呈されたことを報告する。